

前近代東アジア窯業技術系統論

－ロクロの回転方向を視座として－

尾野善裕

- I. はじめに
- II. 陶磁器生産におけるロクロの回転方向に関する研究史
- III. 朝鮮半島における陶磁器製作技術の二大系統
- IV. 施釉陶磁器生産への転換とロクロの回転方向
- V. おわりに

要旨 陶磁器の成形に用いられるロクロの回転方向は、陶磁器の製作技法を研究する上で、ごく単純かつ基礎的な分析視点であったにもかかわらず、これまで研究者の注目度が概して低かった。そうしたなかで、日本列島と朝鮮半島・中国大陸におけるロクロの回転方向に顕著な地域差があることを指摘した内藤匡の研究と、内藤が指摘した現象の歴史的背景にまで論及した津田武徳の研究は、先駆的であると同時に画期的でもあったが、なお未解決の問題を残している。

こうした研究動向を踏まえ、本研究では日本・朝鮮半島・中国の伝世・出土古陶磁を対象として、陶磁器生産におけるロクロ回転方向の調査を進めるとともに、その系統的理解に努めた。その結果、桃山時代に朝鮮半島から渡来してきた陶工が開窯したにもかかわらず、これまで一般的な朝鮮陶磁とは異なるとされてきた薩摩焼のロクロ回転方向が、朝鮮陶磁のなかでも「甕器」と呼ばれる一群の陶器の成形技術に由来すると考えられるとの結論に至った。また、初期には中国陶磁と同じロクロ回転方向で成形されていた高麗青磁や白磁が、次第に朝鮮半島に特有のロクロ回転方向で成形されるようになる現象を指摘し、その背景に三国時代以来の陶質土器生産と磁器生産技術の結合を読み取ることができるのではないかとの見通しを示した。

キーワード 中国大陸 朝鮮半島 日本列島 陶磁器 ロクロ 回転方向 技術系統

I. はじめに

本研究は、陶磁器生産における成形技法、とりわけロクロの回転方向に着目し、日本列島から朝鮮半島、さらには中国大陆を射程に入れて、製陶技術の伝播と発達の歴史的過程をあきらかにしようとするものである。

平面的な円運動であるロクロの回転方向には、時計回りともいうべき右回転と、逆時計回りの左回転があるが、ここでは記述が煩瑣になることを避けるため、時計回り（右回転）をR、逆時計回り（左回転）をLと略記することとする。

陶磁器の製作（成形）におけるロクロ回転は、同一個体であっても、

- ①水挽き成形
- ②ロクロからの切り離し
- ③切り離し後の底裏のケズリ調整（仕上げ）

という工程の違いで、回転方向を変えていることがある。唐物すなわち中国製とみせかけるという意図の下に、R水挽き成形であるにもかかわらず、意図的にL糸切りされている御室焼の茶入¹など、例外もまったくないわけではないものの、概して②工程の回転方向は①工程の回転方向と一致することが一般的で、③工程の作業によって痕跡が消されてしまうことも珍しくない。このため、以下では多くの個体において痕跡を観察可能な①工程と③工程のロクロ回転方向を組み合わせて、

- ①R水挽き成形・③Rケズリ調整を、RR技法
- ①R水挽き成形・③Lケズリ調整を、RL技法
- ①R水挽き成形・③ケズリ調整なしを、R0技法
- ①L水挽き成形・③Rケズリ調整を、LR技法
- ①L水挽き成形・③Lケズリ調整を、LL技法
- ①L水挽き成形・③ケズリ調整なしを、L0技法

と表記することとしよう。

II. 陶磁器生産におけるロクロの回転方向に関する研究史

陶磁器の成形に用いられるロクロの回転方向に着目した研究としては、古く中山平次郎による初期高取焼の窯跡出土品に関する論考²があり、論文公表は大正4年（1915）にまで遡る。この論文のなかで中山は、高取焼の永満寺宅間窯と内ヶ磯窯の出土陶片に分析をくわえ、それらがRL技法で製作されていることを指摘すると共に、蹴ロクロの使用を推定した。

管見の限り、その後しばらくの間、ロクロの回転方向に注目した研究は見当たらないが、

内藤匡は昭和19年（1944）に公刊した著書³のなかで、陶磁器成形時のロクロ回転に次のような地域色があることを指摘した。

- ・中国…………… L L 技法
- ・日本…………… R R 技法
- ・日本（肥前・九谷）…………… R L 技法
- ・朝鮮半島…………… R L 技法
- ・一部に例外……………（薩摩：L L 技法、朝鮮半島北部の一部：R R 技法）

この内藤の研究は、ロクロの回転方向と産地の間に密接な関係があることを指摘した点で、すこぶる先駆的かつ画期的な研究であった。しかし、現象面の指摘にとどまっており、現象を惹起せしめた歴史的背景の考察には至っていない。

昭和41年（1966）には田辺昭三が⁴、陶邑古窯跡群（陶邑窯）出土の須恵器杯・杯蓋に施されているケズリ調整に分析をくわえ、初期（TK208型式）にはRとLが混在しつつもLが主流であるが、次第にRが増加してゆき、最終的（TK209型式以降）にはRに統一されることを指摘している⁴。ただし、田辺が論及したのは③工程のケズリ調整についてだけで、水挽き成形やロクロからの切り離しの際の回転方向には触れていない。

陶邑窯に関する田辺の研究以後、陶磁器成形時のロクロ回転についての言及を発掘調査報告書や研究論文のなかに散見するようになるが、高取焼茶入についての尾崎直人の研究⁵をはじめとして、いずれも地域・産地を絞って論じていることが特徴である。

こうした研究動向のなかで、平成6年（1994）に発表された津田武徳の論文⁶は、時代を近世（江戸時代）に限ってはいるものの、内藤の研究視点を継承し、日本のみならず朝鮮半島・中国からベトナムの陶磁器までを対象とした意欲的研究であった。津田は生産地ごとの詳細な検討を踏まえた上で、陶磁器成形時のロクロ回転方向には次のような地域性があるとした。

- ・日本（瀬戸・美濃・京都・信楽）…………… R R 技法
- ・日本（三田）…………… R R 技法・R L 技法混在
- ・日本（肥前・高取・上野・九谷・南紀男山）…………… R L 技法
- ・日本（萩）…………… R L 技法・L L 技法混在
- ・日本（肥後・薩摩・沖縄）…………… L L 技法
- ・朝鮮半島…………… R L 技法
- ・中国…………… L L 技法

さらに、この分析結果を踏まえて、肥前・高取・上野などのR L技法が朝鮮半島起源と考えられることと共に、水挽きとケズリの回転方向が一致しないR L技法には、手廻しロクロよりも回転方向の自由度が高い蹴ロクロの使用が推定できることを指摘している。ま

た、九谷と南紀男山については、朝鮮半島系のR L技法が肥前を介して二次的に波及したとみなし、三田でのR R技法とR L技法の共存については、R R技法の京都とR L技法の肥前からそれぞれに工人を招聘したという古文獻に記された歴史的事実を反映するものであると解釈した⁷。

津田論文は、肥前（唐津・有田）・高取・上野・萩・薩摩といった西日本の諸窯が、文禄・慶長の役（壬辰戦争）を通じて桃山時代に来日した朝鮮人陶工によって開かれたという歴史的経緯を、物的証拠から裏付けた研究として高く評価できる。ただし、朝鮮半島系の蹴ロクロが導入されている肥後・薩摩・沖縄のL L技法については不可解であるとし、萩でR L技法とL L技法が混在することについての歴史的背景についても論及がないなど、依然として未解決の問題が残されている。

Ⅲ. 朝鮮半島における陶磁器製作技術の二大系統

東京国立博物館での開催を封切りとして、平成22年（2010）から日本国内（京都・九州国立博物館）を巡回した特別展覧会『細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－』の準備にあたり、当時京都国立博物館に勤務していた筆者は、永青文庫の所蔵品を調査する機会に恵まれた。その際、茶の湯の世界で「高麗茶碗」と呼んで珍重されている朝鮮半島製の喫茶碗のなかでも、「柿の蒂茶碗」（第1図）と呼ばれているもののなかに、L L技法での製作痕跡が残されていることに気がついた⁸。

これは、一部地域（朝鮮半島北部）におけるR R技法の存在が指摘されているものの、それまで基本的にR L技法であると考えられてきた朝鮮陶磁の成形技術のなかに、L L技法が存在していたことを示唆するものであった。この事例から筆者は、萩・薩摩など桃山時代に文禄・慶長の役（壬辰戦争）で渡来した朝鮮人陶工が開いた窯や、上野・薩摩の技術が二次的に波及したことが確實視される肥後・琉球（沖縄）に認められるL L技法も、朝鮮半島系技術の伝播として説明できるのではないかとこの着想を得るに至った。



第1図 永青文庫所蔵「柿の蒂茶碗」
（註8文献より転載）

そうした問題意識を持ちつつ、伝世・出土古陶磁の調査を継続していたところ、近世日本の対朝鮮外交僧である以酌庵輪番僧を輩出した建仁寺の塔頭（両足院・正伝永源院・大中院）に、朝鮮古陶磁が多数伝来しており⁹、そのなかでも甕器（オング）と呼ばれる一群（第2図）の頸部・口縁部がL水挽き成形されていることに気がついた¹⁰。甕器は、同じく朝鮮陶磁ではあって



1(両足院70)



2(大中院18)



3(両足院189)



4(両足院101)



5(両足院254)



7(両足院190)



6(両足院216)



8(両足院217)



9(正伝永源院269)



12(両足院211)



14(両足院213)



10(両足院214)



13(両足院212)



15(正伝永源院270)



11(両足院215)

第2図 建仁寺塔頭(両足院・正伝永源院・大中院)伝来の朝鮮甕器

第1表 「柿の蒂茶碗」 観察表

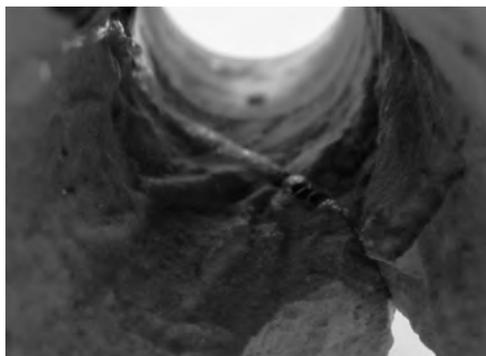
所蔵	銘	水挽き	ケズリ	備考
永青文庫		L	L	外面体部下半ロクロ目弱い
湯木美術館	藤波	L	L	
根津美術庵	瀧川	L	L	内面底部ロクロ目不明瞭
五島美術館		R	L	外面体部下半ロクロ目見えず
東京国立博物館	唐衣	R	L	

もR L技法のロクロ水挽き成形を基本とする青磁・白磁・粉青沙器とは異なり、胴部は粘土紐・タタキ成形で、頸部から口縁部のみをL水挽き成形している点に大きな特徴がある。

つまり、朝鮮陶磁は成形技法によって大きく二区分できるのだが、朝鮮半島では青磁・白磁・粉青沙器の製作工人を「沙器匠」、甕器の製作工人を「甕匠」と呼び、生産機構を異にする集団として文化的に区別するという¹¹。これを踏まえた上で、「高麗茶碗」のなかに日本からの注文によって製作された特注品が少なからず存在しているという指摘¹²を考え合わせるならば、「柿の蒂茶碗」は日本からの注文によって「甕匠」が製作したものではないかとの推測が可能となろう。

ただし、建仁寺に伝来した甕器をみる限り、甕器の基本的な製作技術はL 0技法であって、L L技法ではない。しかし、「甕匠」が通常はおこなわないケズリ調整をあえて器物（製作品）に施す場合、口縁部や頸部を水挽き成形するのと同じ方向にロクロを回転させるならば、現象面的にはL L技法となる。そうした観点から、伝世の「柿の蒂茶碗」を5例調査したところ、過半の3個体がL L技法で製作されていることと共に¹³、外面体部下半や内面底部（見込み）に明瞭なロクロ目が認められない事例が少なからず存在していることが判明した（第1表）。

この事実は、「柿の蒂茶碗」の多くが基本的に甕器と同じ粘土紐からの成形によって製作されたものであることを暗示しており、先に示した「甕匠」製作説を補強するものといえる。また、肥前地域の窯のなかでも最初期に位置づけられる岸岳古窯跡群からの出土陶片を調査したところ、小型の碗・皿類を中心に多くの器物がR L技法で製作されている一方で、徳利などタタキ成形の壺・瓶類は基本的にL 0技法での製作であることが確認できた（第3図）¹⁴。



第3図 岸嶽古窯跡群（飯洞甕下窯）
出土のタタキ成形の瓶頸部内面

これらの調査事例から、同じく桃山時代に朝鮮半島から渡来した陶工によって開かれた窯場であっても、渡来陶工の出自が

「沙器匠」か「甕匠」だったかによってロクロの回転方向に差が生じたのではないかとの推測が可能となる。つまり、薩摩をはじめとして肥前（唐津）・萩・肥後・沖縄などの西日本諸窯に認められるL L技法やL O技法を、桃山時代に朝鮮半島から渡来した「甕匠」に起源するものとする考え方¹⁵である。これは、西日本諸窯が朝鮮人陶工によって開窯されたという歴史的事実や伝承とも符合しており、窯構造・窯道具やタタキ成形という製作技法の共通性から、薩摩焼や沖縄の壺屋焼の技術的源流として朝鮮半島の甕器を想定する見解¹⁶とも整合性が高い。R L技法を主流としつつも、肥前（唐津）・上野・高取などでL L技法との共存が認められるのは、唐津焼について既に指摘¹⁷があるように、朝鮮半島では分業化していた「沙器匠」と「甕匠」が、日本においては同一の窯場で協業していたことを示しているのではないか。

これまで、朝鮮陶磁が基本的にR L技法で製作されていると考えられてきたのは、調査・研究対象が専ら青磁・白磁・粉青沙器といった「沙器匠」による製作品に偏っていたことが原因であろう。高麗時代以降の古陶磁研究は、韓国でも日本においても美術史研究者が牽引してきたという歴史的経緯があるが、美術品とは認識されない「甕器」が研究対象から外されてしまった結果、間違いとまではいえないが、偏りのある認識が流布してしまったと考えられる。

IV. 施釉陶磁器生産への転換とロクロの回転方向

1. 日本における灰釉陶器生産への転換

よく知られているように、日本における平安時代の灰釉陶器生産や鎌倉・室町時代の古瀬戸系施釉陶器の生産は、その源流を尾張の猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）における須恵器生産に求めることができる¹⁸。猿投窯においても初期（古墳・飛鳥時代）の須恵器生産では、陶邑窯と同様に水挽き成形・ケズリ調整ともR・Lが混在していた¹⁹。しかし、奈良時代の間にはR R技法への画一化が進み、猿投窯の流れを汲む瀬戸・美濃の成形技法も津田が指摘した通り、R R技法である。そして、文禄・慶長の役（壬辰戦争）を通じて、桃山時代に朝鮮半島系のR L（沙器系）・L L（甕器系）技法がもたらされるまで、日本で生産された施釉陶器（灰釉陶器・古瀬戸系施釉陶器）は、ほぼ例外なくR R技法で製作されていた²⁰。

灰釉陶器生産開始直前期の尾張における須恵器生産が、既に灰釉陶器と同じR R技法で画一化されていることは、灰釉陶器の成形技法が在来の須恵器生産を基盤としていることを示していると考えられよう。かつて、平安時代初期に猿投窯で始まる日本の灰釉陶器生産は、中国の青磁生産技術の未熟もしくは部分的な導入と評価されていた²¹。しかし、既に別の機会に論じたことがあるように、灰釉陶器生産の開始に際して新たな大陸（中国・

朝鮮半島)系窯業技術が導入された徴証はなく、施釉技法を含めすべての灰釉陶器生産技術の要素を、奈良時代以前の日本に存在していた製陶技術の枠組みで説明することが可能である²²。また、成形技法が日本在来の須恵器生産技術を基盤としていることは、灰釉陶器生産の開始にあたって、新たな大陸系窯業技術の導入はなかったという私見ともよく一致する。

一方、朝鮮半島から陶質土器の製作技術が伝えられて間もない古墳時代の日本の須恵器に、水挽き成形・ケズリ調整共にR・Lが混在していることから、三国時代の朝鮮半島における陶質土器の成形にかかるロクロ回転も同様であったとの推測が可能である。しかし、のちに施釉陶磁器生産へと移行してゆく過程で、RR技法が主流となった日本に対して、朝鮮半島では沙器でRL技法、甕器でL0技法が主流化するという異なった道筋を辿っている。既に指摘があるように、回転が一方に固定化されやすい手廻しロクロに対して、蹴ロクロは回転方向を自在に変えられるという特性があることから²³、辿った道筋の違いはロクロの構造変化・発達過程とも深く関連しているのではないかと考えられる。

2. 朝鮮半島における磁器生産への転換－中国渡来技術と在来製陶技術の融合－

いわば日本で自生した平安時代の灰釉陶器生産とは異なり、朝鮮半島で高麗時代に始まった磁器生産の技術的起源については、製品の形質的類似性や窯道具・窯構造(磚築窯)の共通性から、陶工の移動をとまなう中国からの技術導入説が古くから有力視されており²⁴、現在では定説化した感がある²⁵。とりわけ、初期高麗青磁に関しては中国浙江省にある越州窯からの技術的影響が想定されており、技術者集団自体が移動していたならば、中国系の成形技術であるLL技法が導入されていると考えることが自然であろう。

それにもかかわらず、内藤や津田も指摘するように、高麗青磁やその流れを汲む粉青沙器の圧倒的に多くは、RL技法で製作されているという現実が厳然として存在する。一体、なぜこのような現象が生じたのだろうか。

そうした問題意識の下、東京国立博物館に所蔵されている高麗時代初期²⁶の青磁・白磁20点(第4図)を重点的に調査したところ、11世紀以前のものであることが確実視される事例の多くはLL技法で製作されていることが判明し、確かなRL技法の事例は見出されなかった。その一方で、11~12世紀のものとする事例のなかには、RL技法での製作例を複数見出すことができ、朝鮮半島での磁器生産は12世紀頃からRL技法への転換が進むのではないかという見通しが得られた(第2表)。また、窯跡出土陶片については十分に悉皆的な調査を実施できていないが、京畿道廣州郡二東面西里(第5図)・全羅北道鎮安郡聖寿面道通里など高麗時代の比較的初期とされる窯跡出土品のなかに、LL技法で成形されているものの存在を見出すことができる²⁷。

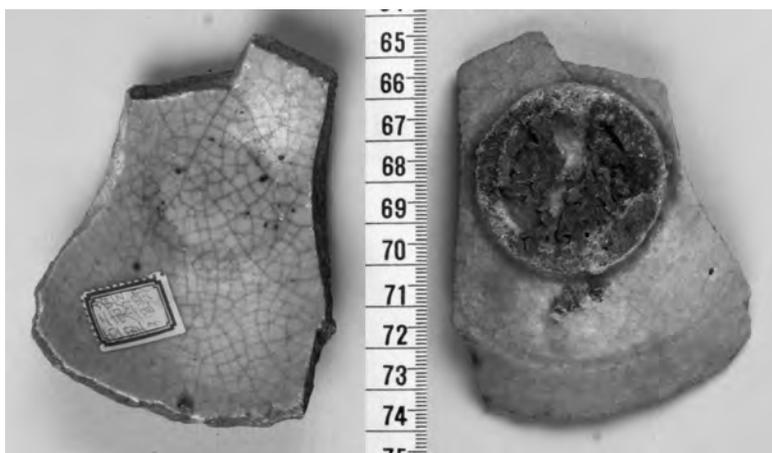
これらの事実、窯道具や窯構造の共通性から推測されているように、高麗青磁の生産



第4図 東京国立博物館所蔵の初期高麗青磁・白磁

第2表 東京国立博物館所蔵の初期高麗青磁・白磁観察表

No.	名称	列品番号	時代(年代)	水挽き	ケズリ
1	青磁碗	TG-39	高麗時代(10世紀)	L	L
2	白磁輪花皿	TG-68	高麗時代(10世紀)	L	L
3	青磁輪花鉢	TG-2392	高麗時代(10世紀)	L	L
4	白磁碗	TG-2892	高麗時代(10-11世紀)	L	L
5	白磁碗	TG-2893	高麗時代(10-11世紀)	L	L
6	青磁唐草文碗	TG-38	高麗時代(11世紀)	L	L
7	青磁碗・輪花形托	TG-40	高麗時代(11世紀)	L	L
8	青磁唐草文輪花鉢	TG-54	高麗時代(11世紀)	R	L?
9	青磁碗	TG-61	高麗時代(11世紀)	L	L
10	青磁盤口瓶	TG-65	高麗時代(11世紀)	L	?
11	青磁碗	TG-87	高麗時代(11世紀)	L?	L
12	青磁蓮弁文鉢	TG-2692	高麗時代(11世紀)	L?	L
13	青磁印花蓮唐草文輪花鉢	TG-8	高麗時代(11-12世紀)	R?	L
14	青磁鸚鵡文鉢	TG-17	高麗時代(11-12世紀)	R	?
15	青磁印花牡丹文輪花鉢	TG-58	高麗時代(11-12世紀)	R?	?
16	青磁托	TG-81	高麗時代(11-12世紀)	L	L
17	青磁白堆線文輪花皿	TG-85	高麗時代(11-12世紀)	L?	L
18	青磁鉄絵草文瓶	TG-102	高麗時代(11-12世紀)	L	L
19	青磁鉄絵唐草文水注	TG-2051	高麗時代(11-12世紀)	R	L
20	青磁鉄絵草葉文瓶	TG-2151	高麗時代(11-12世紀)	R	?



第5図 京畿道広州郡二東面西里窯跡出土陶片(浅川伯教蒐集・京都国立博物館蔵)

技術が当初は成形手法も含めて中国から一体的に導入されたことを示していると考えられよう。それにもかかわらず、のちに高麗青磁やその流れを汲む粉青沙器の成形手法がRL技法へと転換しているのは、朝鮮半島に定着した磁器生産技術が次第に在来の製陶技術である陶質土器の成形技法と結合したためではなかろうか。すなわち、三国時代以来の陶質土器生産工人は、ある時期(高麗時代か)にタタキ成形を得意とし、L0技法を採用した

技術者集団と、ロクロ水挽き成形を得意とし、R L技法を採用した技術者集団に分化し、のちに前者が甕匠、後者が磁器生産者（沙器匠）へと転換していった、という仮説である²⁸。

そこで、この仮説の検証を主たる目的として、東京国立博物館と京都国立博物館に所蔵されている三国時代から高麗時代にかけての陶質土器や、その流れを汲むと考えられる高麗時代の焼締陶器 6 例について、ロクロの回転方向を調べてみた（第 6 図）。

- ・事例 1：高杯（5～6 世紀）京都国立博物館蔵（J 甲60-8） R L 技法
- ・事例 2：壺（5～6 世紀）京都国立博物館蔵（J 甲60-13） R O 技法
- ・事例 3：高杯（6 世紀）京都国立博物館蔵（J 甲60-9） L 水挽き
- ・事例 4：印花文有蓋碗（7～8 世紀）京都国立博物館蔵（J 甲60-20） L O 技法
- ・事例 5：波状文扁壺（13 世紀）京都国立博物館蔵（J 甲60-22） R O 技法
- ・事例 6：象嵌瓶（13～14 世紀）東京国立博物館蔵（TG-2076） R L 技法



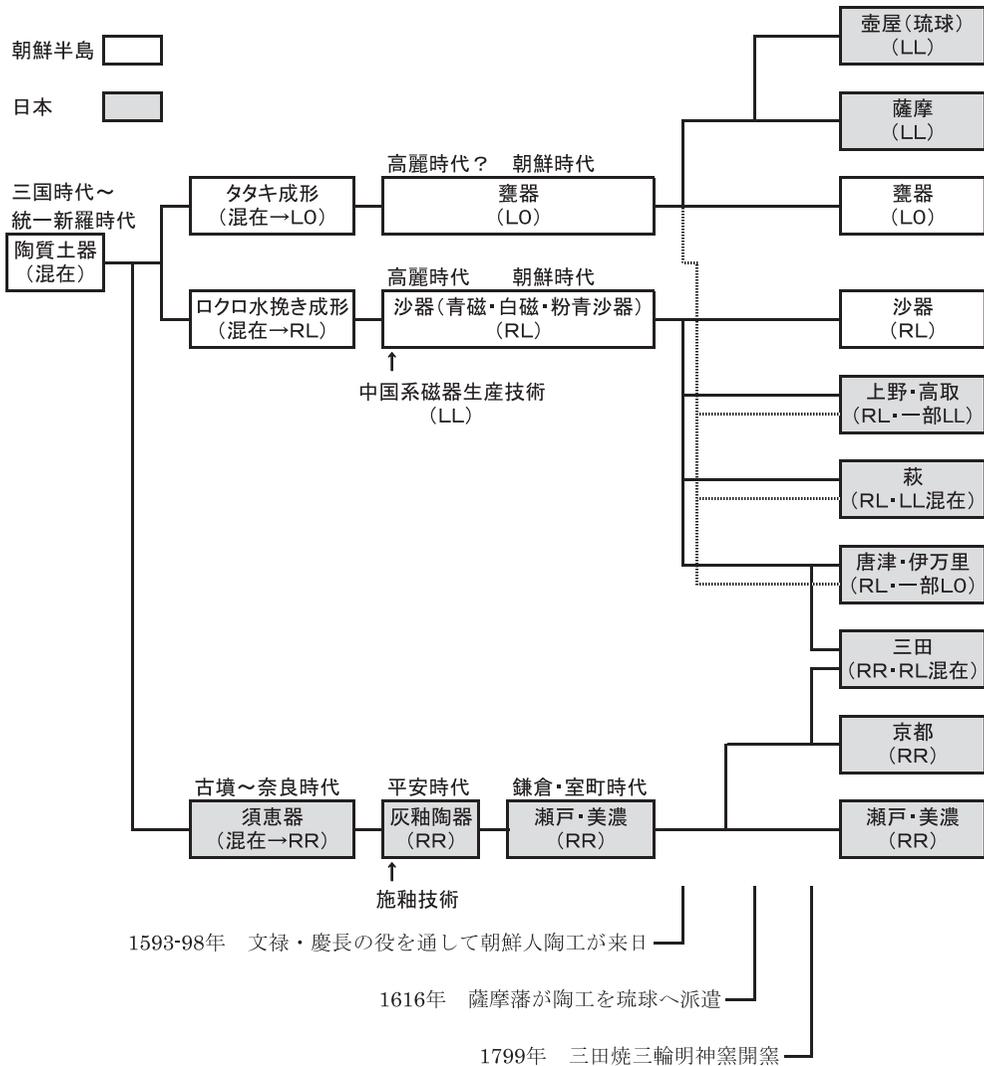
第 6 図 東京国立博物館・京都国立博物館所蔵の陶質土器と焼締陶器

いささか調査事例が少な過ぎる憾みはあるものの、先に推定したように、三国時代から統一新羅時代にかけての陶質土器にR水挽き（RL技法・R0技法）とL水挽き（L0技法）が混在していることを事例1～4より確認することができる。その一方で、扁壺という形態や象嵌といった装飾技法の点で高麗青磁と高い共通性を示す事例5・6が、いずれもR水挽きで成形されていることは、同時期の高麗青磁が基本的にRL技法で成形されていることとも共通する²⁹。したがって、朝鮮半島における磁器・粉青沙器生産のロクロ回転方向が中国陶磁と異なっている原因に、在来の陶質土器生産の成形技術の影響を考える仮説が成立する可能性は、充分にあるといえるだろう。

V. おわりに

以上、小稿では日本・朝鮮半島・中国の伝世・出土古陶磁を対象として、陶磁器生産におけるロクロ回転方向を進めるとともに、その系統的理解に努めた。その結果、統一新羅時代以前の朝鮮半島における陶質土器生産に認められた多様なロクロ回転方向のうち、RL技法が高麗時代に中国渡来の磁器生産と結合し、L0技法が朝鮮時代の甕器生産に継承されていくとの見通しを得ることができた。また、薩摩をはじめとして西日本の諸窯に認められるLL技法の存在を、L水挽き成形という点での共通性に着目し、朝鮮半島の甕器系製陶技術に由来するという考え方を示した。いささか疎漏があることを承知の上で、この結論を取って単純化して図示するならば、日本と朝鮮半島における陶磁器成形技術の伝播・系統は、おおよそ第7図のようにまとめることができる。

もちろん、調査・検討事例数が著しく少ないため、今後さらに調査・検討事例を増やして検証を進める必要があることは論を俟たないし、小稿は技術の継承・伝播の大きな流れを仮説的に示しただけで、予察の域を超えるものではない。しかし、朝鮮半島の磁器生産におけるLL技法からRL技法への転換過程を詳細に辿る作業は、高麗時代に朝鮮半島へ渡来した中国系磁器生産技術と、統一新羅時代以前に遡る朝鮮半島在来の製陶生産技術の融合過程を解明するための大きな一助となるに違いない。



第7図 中国・朝鮮半島から日本への陶磁器成形技術の伝播に関する系統的理解

謝 辞 小稿作成に至る過程で、次記の皆様ならびに機関から格別のご配慮を賜ると同時に、様々な御教示を賜った。文末ではあるが、明記して深謝の意を表わします（個人・機関50音順）。

赤沼多佳 阿部純子 荒木正直 池田亘 砂澤祐子 岩本康成 河合恭典 佐藤隆
下村菜穂子 倉成多郎 陣内康光 谷端昭夫 西田宏子 畑中英二 平尾政幸 深野信之
降矢哲男 三笠景子 三宅秀和 松永悦枝 宮川禎一 李愛玲

始良市教育委員会 荒木集成館 一支国博物館 永青文庫 唐津市教育委員会 京都国立博物館 五島美術館 正伝永源院 聖母宮 大韓民国国立中央博物館 大中院 東京国立博物館 根津美術館 湯木美術館 両足院

註

- 1 梶山博史「御室焼和物茶入をめぐる考察」『東洋陶磁』VOL.33、東洋陶磁学会、2004年。
- 2 中山平次郎「高取焼最古の二窯址と其遺物」『考古学雑誌』第5巻第6号、日本考古学会、1915年。
- 3 内藤 匡『古陶磁の科学』宝雲舎、1944年（『改訂古陶磁の科学』二玄社、1962年）。
- 4 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ、1966年。
- 5 尾崎直人「高取焼茶入編年試論－出土陶片を中心に－」『美術史』125、美術史学会、1989年。
- 6 津田武徳「ロクロの回転方向から見た近世陶磁」『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会、1994年。
- 7 筆者も、三輪明神窯出土品の検討を通して、三田焼にR R技法とR L技法が共存していることを確認し、急須など複雑な器形の成形は京都系と考えられるR R技法に依っており、肥前系と考えられるR L技法は専ら碗・皿など単純な器形の成形に偏っていることを指摘したことがある（尾野善裕「三田焼三輪明神窯の開窯とその戦略」『学叢』第29号、京都国立博物館、2007年）。
- 8 口縁部をナデ調整したり高台を削り出したりした際に、胎土中に含まれていた砂粒が、引きずられた痕跡と、見込みに残されていた「の」字状のロクロ目（渦）からL L技法での製作と判断した（尾野善裕「198 柿の蒔茶碗」『細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション－』NHK・NHKプロモーション、2010年）。
- 9 建仁寺の塔頭に伝来している古陶磁のなかに、多数の朝鮮甕器が存在していることについては、東洋陶磁学会の平成29（2017）年度第5回研究会（2018年3月25日）で報告した（尾野善裕・池世梨「建仁寺山内に伝来した朝鮮陶磁と以酌庵輪番僧」『東洋陶磁学会会報』48号、東洋陶磁学会、2018年）。また、両足院所蔵分については目録（京都国立博物館編『社寺調査報告26 両足院（建仁寺塔頭）陶磁編』京都国立博物館、2013年）を刊行済みである。
- 10 胎土中に含まれていた砂粒が水挽き成形の際に引きずられた痕跡から判断した。
- 11 片山まび「朝鮮人陶工とは誰なのか？－全羅道・慶尚道の16世紀窯址と岸嶽系唐津の比較から－」『陶説』第541号、日本陶磁協会、1998年。
- 12 赤沼多佳「茶の湯と高麗茶碗」『高麗茶碗』茶道資料館、1989年。赤沼多佳「注文の高麗茶碗」『高麗茶碗－御本とその周辺－』茶道資料館、1992年。赤沼多佳「高麗茶碗」『日本の美術』第425号、至文堂、2001年など。
- 13 R L技法で製作されている柿の蒔茶碗については、沙器匠による朝鮮半島での製作と共に、写し物としての日本における製作も可能性として考慮しておくべきかと思われる。
- 14 胎土中に含まれていた砂粒が水挽き成形の際に引きずられた痕跡と、瓶類の頸部成形時に器壁内面に生じた振れ皺（第3図）から判断した。
- 15 尾野善裕「清朝官窯と薩摩金襴手」『伝統白薩摩研究会会報 響き』第28号、伝統白薩摩研究会、2015年。なお、タタキ成形専門の陶工集団がかつて朝鮮半島におり、その技術が肥前（唐津）・肥後・沖繩へ伝えられた可能性については、津田論文（前掲註6）のなかでも推論の一案として示されている。
- 16 関 明恵「出土遺物から見た堂平窯」『南九州西回り自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書XIX 堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター、2006年。渡辺芳郎「近世初期九州陶磁器生産における技術変容プロセスモデル化の試み－薩摩焼と肥前陶磁器を事例として－」『考古学は科学か 下 田中良之先生追悼論文集』中国書店、2016年。片山まび「朝鮮時代の「甕器」について－薩摩堂平窯跡との比較を視座として－」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第19号、那覇市立壺屋焼物博物館、2018年。渡辺芳郎「薩摩焼陶工は琉球にどのような製陶技術を伝えたか？」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第19号、那覇市立壺屋焼物博物館、2018年。
- 17 片山まび「一六世紀の朝鮮陶磁と草創期の唐津焼との比較研究－「近世的な窯業」の萌芽を視座とし

- て-』『朝鮮学報』第167号、朝鮮学会、1998年。
- 18 榑崎彰一「古代・中世窯業の技術の発展と展開」『日本の考古学Ⅵ 歴史時代(上)』河出書房、1967年。
 - 19 今のところ、5世紀の窯跡として衆目的一致する東山218-I号窯からの出土品(荒木実・増子康真・大井智晴「東山218号窯の古式須恵器について」『古代人』第33号、名古屋考古学会、1978年)では、水挽き成形・ケズリ調整ともにLしか確認できていないが、やや後出の窯跡と考えられる東山11号窯出土品(荒木実「東山古窯跡11号窯の須恵器」『古代人』第21号、名古屋考古学会、1971年)のなかに、水挽き成形・ケズリ調整共にR・Lが混在することを確認している。
 - 20 千利休(1522~1591)所持と伝える唐津焼の茶碗「子のご餅」と、壱岐の聖母宮に伝わる天正20年(1592)銘の四耳壺の存在を根拠として、唐津焼の初現を文禄・慶長の役以前とする意見もある。しかし、「子のご餅」が利休所持品であるというのは伝承に過ぎず、焼成前に日本語の銘文が記されているからといって、聖母宮の四耳壺も唐津焼であるとは限らない。とりわけ聖母宮の四耳壺は、銘文の記載内容からみて、聖母宮を信仰する壱岐の海民が寄進を目的として、渡航先の海外(中国もしくは朝鮮)で焼かせたものと考えることが十分に可能である。大坂城跡の発掘調査成果(森毅「大坂出土の16・17世紀の陶磁器-美濃陶器を中心に-」『東洋陶磁』VOL.26、東洋陶磁学会、1997年)から、唐津焼の初現年代は1598年を大きく遡らないと考えられることを踏まえ、本稿では唐津焼も文禄・慶長の役を通して来日した朝鮮人陶工によって開窯された蓋然性が高いという立場をとる。
 - 21 榑崎彰一「古代・中世窯業の技術の発展と展開」(前掲註16)。榑崎彰一『陶磁大系第五巻 三彩・緑釉・灰釉』平凡社、1973年。榑崎彰一『日本陶磁全集6 白瓷』中央公論社、1976年。坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討 [I]」『考古学雑誌』第65巻第2号、日本考古学会、1979年。
 - 22 尾野善裕「灰釉陶器生産技術の系譜」『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、1998年。尾野善裕「東海地方における須恵器製作技法の変化とその背景」『古代の土器研究会第6回シンポジウム 古代の土器研究 律令の土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会、2001年。
 - 23 津田武徳「ロクロの回転方向から見た近世陶磁」(前掲註6)。
 - 24 中尾万三『彩壺会講演録 高麗青磁の窯址と其製作品』彩壺会、1925年。中尾万三「青磁の話 高麗青磁」『恩賜京都博物館講演集』第九号、恩賜京都博物館、1930年。野守健「高麗陶磁の研究」清閑舎、1944年。三上次男「高麗陶磁の起源とその歴史的背景」『朝鮮学報』第99・100輯、朝鮮学会、1981年。崔健(吉良文男訳)「韓国初期青磁の分類と変遷-窯址出土品を中心に-」『東洋陶磁』VOL.22、東洋陶磁学会1994年など。
 - 25 吉良文男「朝鮮半島の初期的青磁-高台の形状を中心に-」『高麗青磁の誕生-初期高麗青磁とその展開-』大阪市立東洋陶磁美術館、2004年。李鐘玟「韓半島中部地方の初期青磁窯-高台の形状を中心に-」『高麗青磁の誕生-初期高麗青磁とその展開-』大阪市立東洋陶磁美術館、2004年。張起熏「窯道具からみた韓国初期青磁窯跡の相対編年」『高麗青磁の誕生-初期高麗青磁とその展開-』大阪市立東洋陶磁美術館、2004年など。
 - 26 東京国立博物館所蔵品の年代観は、同館の研究情報アーカイブズ(web archives)の画像検索情報による。
 - 27 京畿道廣州郡二東面西里窯跡出土品については、浅川教蒐集朝鮮古窯跡出土陶片(京都市立東洋陶磁美術館蔵)で確認した。全羅北道鎮安郡聖寿面道通里出土品については、平成12年に文部省の在外研究員として韓国国立中央博物館へ長期出張した際、同館所蔵の窯跡出土陶片を実見した時の調査記録にもとづく。なお、実見の機会を得ていないが、淳化3年(992)の焼成前刻銘陶片が出土したことで著名な黄海道峰泉郡円山里窯跡出土品も、写真図版(『高麗青磁の誕生-初期高麗青磁とその展開-』大阪市立東洋陶磁美術館、2004年)で見ると、L水挽きで成形されているように見受けられる。

- 28 朝鮮半島における磁器生産の技術的変遷という観点からは、磁器生産に陶質土器生産技術が取り込まれたと表現することができる一方、陶質土器生産の技術的変遷という観点からは、陶質土器生産工人が磁器生産技術を獲得したと表現することも可能である。
- 29 事例5は、RL技法ではなくR0技法によって製作されているが、RL技法を得意とする工人の製作であっても、底裏（外面底部）のケズリ調整を省略すればR0技法となるので、そのような事例として解釈することも可能である。

付記 本校脱稿後、実物調査を通して正倉院三彩が日本製であると断定された際に、右回転のロクロによる成形であることが主要な論拠とされていることに気づいた（小山富士夫「総説」『正倉院の陶器』日本経済新聞社、1971年。藤岡了「正倉院の陶器」『日本の美術』第128号、至文堂、1977年）。朝鮮陶磁が一概に左回転での成形とされているなど、事実関係には訂正すべき点もないではないが、小山が西日本諸窯に認められるL水挽きを文禄・慶長の役による朝鮮陶工の来日と関連付ける視点を示していることは注目に値する。

전근대 동아시아 요업기술계통론
- 녹로 회전방향의 관점에서 -

尾野 善裕 (오노 요시히로)

요 지 도자기 성형에 사용되는 녹로 회전 방향은 도자기의 제작 기법을 연구하는 데 있어서 극히 단순하고 기초적인 분석 관점임에도 불구하고 지금까지 연구자들의 주목을 대체적으로 받지 못하였다. 이러한 가운데 일본열도와 한반도 및 중국 대륙의 녹로 회전방향에 대해서 지역 차이가 현저하게 나타난다는 점을 지적한 나이토 타다시(内藤匡)의 연구와, 나이토(内藤)가 지적한 현상의 역사적 배경에 대해서 언급한 츠다 타케노리(津田武徳)의 연구는 선구적이면서도 획기적이었으나 아직 해결되지 않은 문제점을 갖고 있다.

이러한 연구 동향을 바탕으로 본 연구에서는 일본, 한반도, 중국의 시대별 흐름, 출토된 옛 도자기를 대상으로 도자기 생산에 있어서 녹로의 회전방향에 대한 조사를 추진하고, 이와 함께 그 계통적 이해를 추구하였다. 그 결과, 모모야마(桃山) 시대에 한반도에서 도래한 도공이 개요(開窯)했음에도 불구하고, 지금까지 일반적인 조선 도자기와는 다르다고 알려진 사츠마 야키(薩摩焼)의 녹로 회전방향이, 조선 도자기 중에서도 옹기라 불리는 일련의 도기 성형기술에서 유래된다는 결론에 이르렀다. 또한 초기에는 중국 도자기와 같은 녹로 회전방향으로 성형되었던 고려청자나 백자가 차츰 한반도 특유의 녹로 회전방향으로 성형된 현상을 지적하며, 그 배경에 삼국시대 이래의 도질토기 생산과 자기 생산기술이 결합되었을 수 있다는 전망을 제시하였다.

주제어 : 중국 대륙, 한반도, 일본열도, 도자기, 녹로(口ク口), 회전방향, 기술계통

Inter-regional Relationships of Ceramic Technology in Premodern East Asia: Focusing on the rotational direction of the potters' wheel

Yoshihiro Ono

Abstracts: The potters' wheel is a simple, fundamental, and important aspect of ceramic production but research on its rotational direction has not received sufficient scholarly attention. Exceptions to this are the pioneering and ground-breaking studies by Takenori Tsuda and Tadashi Naito. The former pointed out significant regional differences between Japan, Korea, and China, while the latter pursued the historical background of these differences. However, some problems remain unresolved.

This paper aims to examine excavated and inherited ceramics to systematically understand the rotational direction of the potters' wheel in Japan, Korea and China across different time periods. Results revealed that the rotary orientation of *Satsuma-yaki*—initiated by immigrant Korean potters—was influenced by production techniques of Korean *Onngi* pottery, contrary to previous studies which regarded *Satsuma-yaki* as different to Korean ceramic traditions. Further, Korea gradually changed the orientation away from that used in Chinese ceramics, which might indicate the integration between indigenous *Dojil* pottery and Chinese porcelain production techniques.

Keywords: The Chinese Continent, The Korean Peninsula, The Japanese archipelago, Ceramics, Potters' Wheel, Rotational Direction, Technological Tradition